

「国語国文学界の展望」かつ「近世小説（前期）」という与えられたテーマに対して、ひどく的はずれなことを述べようとしていることを、予めことわっておきたい。

学問の進歩とはいったいなんなのだろう。このところ、そんなことばかりを思う。五十年前の論文といまの論文とを比較して、たしかに違う点が多い。ところが、その違いが一概に進歩と呼び得る体のものなのだろうか。何を馬鹿なことを言い出すのか、そんなことは個人差があるに決まっている、と言われるかもしれない。しかし、何の分野でもよい、理科系の学問ではどうだろう。そのような発問そのものが滑稽なほど、歴然たる差異があるはずだ。いつぼう、国語国文学の世界では、ある研究者が切磋琢磨して石を積み上げる。ところが、後人はその上にすぐに石を載せてゆくのではなく、また一から積み上げるといような側面が大きいのではないか。

とはいえ、国語国文学の分野においても差異はある。五十年前の研究者が利用出来なかった大きな武器が存在するからである。それは、国書総目録、国文学研究資料館によるマイクロフィルムと書誌データの収集公開、日本国語大辞典、の三つで、国語国文学の研究にかかわるあらゆる者がその恩恵を蒙っている。それらは、それ以前と以後の仕事の質を大きく区別する道具で、まさに「画期的」な偉業であった。

個々の研究者による貢献をも含めて、そのような研究基盤の向上こそが、学問の進歩につながるものだろう。そういった方面を中心に、今後の展望ないし課題について、考えるところを記したいと思う。

一 書誌 附、出版史・伝記

近世前期の小説——それは井原西鶴の浮世草子を最高の価値ある結実とするのであるが——を前代のそれと区別する本質的な性格とは、いうまでもなく当代性の重視である。したがって、その解明にとってまず必要なことは、文学の背景にある同時代的現実を知ることであろう。ところが、いつぼうで近世前期、元禄ごろまではまだまだ世間一般にとって当代に価値ありとするまなざしが未成熟で、その結果、同時代を記録した文献資料が乏しい。西鶴を読む上で何とも口惜しいことは、西鶴が読者と共有しようとした巷談なり事件譚を、多くの場合、我々は共有出来ないという一点である。そのような話を含んでいそうな書物は、先学によって博搜され尽くしているといつて、過言ではない。この点で、今後の研究者は何の手出しも出来ないのだろうか。

ここで書誌について考えたい。思うに書誌とは、その書物・文献資料を手にとって見ることの出来ない人が、その書物・文献資料について必要な情報を共有出来るように配慮された記述をいう。もちろん詳しくければ詳しいほど、よりよい書誌であるに決まっている。しかしながら、それを必要とする人が常識的に見てほとんどいないような、些末な情報を載せることもまた意味がない。

ところで、書物には書籍的資料と文書的資料とがあると思う。書籍的資料とは、序や跋があるなど、第三者、殊に後世人によって、その書物の内容が把握されるよう、何らかの配慮がなされたものをいう。これは、個々の資料を作った人がそのように明確な意識があ

ったわけではなく、そのような書物を作る「型」に則っているという意味である。いっばう、文書資料とは、そのような配慮の希薄な、つまり同時代的な必要に応じて作られたもので、たまたま後人に価値を認められて現在に残った資料をいう。

日本の書物文化の著しい特徴は、文書資料の多さではなからうか。それらは当然一点限りのものが多い。そして、資料の性格を把握するためには、隅々にまで目を通す必要がある。一例を示そう。

西尾市岩瀬文庫所蔵『大徳寺墨蹟集』という写本。書名は仮題で、外題も内題もない（このこと自体がひどく「文書的」である）。序文も跋文も奥書も識語も何もなし。内容は、茶道で珍重される大徳寺関係の禅僧による墨跡類を、某人が鑑定をした際の覚書である。墨跡の縮図・寸法に鑑定の年月日、依頼者名、どのように回答したか、について書き留めてある。鑑定の年記は元禄末年より享保年間に及ぶ。内容を子細に見ると、書中に、江戸の書状について「右江月和尚墨痕也 義雪（横写印「義雪」）／右享保九甲辰七月伊藤喜泉より来ル 正筆 即右之通奥書仕遣也」と、鑑定を施した際の極め書の写しがあった。ここから直ちに、鑑定者つまり本書の筆者は大徳寺第二百八十五世住持の天柱義雪と判明する。この資料の場合、天柱は日常の生活の営みとして、鑑定の備忘を手許に残したに過ぎないのであって、第三者がそれを見ることを予期していない。

あるいは、後人の読者を意識しつつも、匿名の資料もあり、これまたわかりにくい。名古屋大学神宮皇学館文庫所蔵『地獄物語』写本一冊は、巻末に万延元年の附記があるものの、著者名を顕さず、序跋もない。内容は、安政の大獄に関係して「青山の獄」のち「浅草の獄」に禁錮された著者が、獄中生活の見聞や、同囚や牢番より聞いた珍談奇談を書き綴ったもので、極めて面白い話題に満ちている。これも子細に読むと、著者は紀州藩関係者の伊勢人で、後に赦されて帰国した人とわかる。関連資料を調べると、紀州藩関係者で安政大獄により投獄されたのは唯一人、紀州藩御用達、伊勢松坂の豪商で尊皇の志士、世古恪太郎（延世）とわかり、すなわち同人の自筆本と判明する。当時の情勢下、内容から見て匿名性を余儀なくされたのである。

これらのような資料の場合、いわゆる書誌を記しただけでは不十分で、内容にまで踏み込んだ記述がどうしても必要となる。日本全国の文庫・図書館にある古籍について、そのような内容記述的な書誌データベースが整備されるならば、我々は闇の中にある日本古籍の全貌を明らかにすることが可能となる。その中から、書名からは思いもかけないような重要な内容をもつ資料の存在が発見し、新たな発見につながるはずだ。

国文学研究資料館で公開している「日本古籍総合目録」データベースによれば、国書総目録とその補遺である古籍総合目録に収められる古籍の総タイトル数は約四十五万であるらしい。我々が二〇〇〇年六月より取り組んでいる岩瀬文庫の悉皆調査と書誌データベース化では、所蔵古籍全一万八千タイトル（推定、ただし唐本・朝鮮本・明治以後の和装本を含む）のうち一万二千タイトルについて調査入力を終えている（近年中に公開開始の予定）。その他、名古屋大学神宮皇学館文庫では全二千タイトルのうち千五百タイトルについて終了、こちらは試験的に既に公開している（名古屋大学附属図書館ホームページ参照）。いずれもささやかな、実験的な試みに過ぎない。が、もしも数十組のグループが同じことを各地の図書館・文庫で進めてくれたならば、ほぼ全ての古籍を網羅することが出来る計算になる。そんな日が実現すると、それ以前とは全く期を画するような、

新たな研究状況が出現することだろう。

ここで強調しておきたいのは、あらゆる分野に渉る書物を総体的に扱う仕事こそ、疑いなく国文学者の責務であるということである。それは、文学が社会のあらゆる事象と関係を持つからである。また、さまざまなテキストを一字一句にこだわって丁寧に取り扱う態度や、書物そのものを慈しんで紙面に触れる手つきに、国文学者ならではのものがあると信じるからである。

もう一つ、近世の文学が前代と異なることは、出版をその基盤に置いたことである。とりわけ近世の小説は基本的に出版物として商品化された。したがって、出版史の解明もまた不可欠である。そのためにまず第一になすべきは、どの版元がいつどのような書物を出版したのか、その活動を明らかにすること、具体的に言うと、あらゆる分野に渉る書物の刊記データを集積することである。

その点について、まず国文学研究資料館のマイクロ資料のデータベースは、ある版元の出版物を探す上で大きな貢献を果たしてくれる。また、個々の重要な版元について、出版物年表を中心とした詳細な研究が、近年次々と発表されつつある。

そして、前述したような詳細な記述的データベースが、日本古典籍を網羅するならば、この問題も一挙に解消する。その結果、『好色一代男』初版本の幻の版元、荒砥屋孫兵衛が思わぬ本の刊記に姿を現すかもしれない。

しかしながら、それは遠い将来の話であって、やはり個々の研究者が手許に蓄積したデータを公開する場を設けるべきなのだろう。特に版本は市場に出回るものや個人の蔵本も多く、公開された図書館・文庫だけでは不十分で、現在・過去の古書目録を含め、あらゆる機会を通して把握し得る刊記データを集める必要がある。

その際、原本を見ることが出来る場合には、その刊記がオリジナルなものであるのかどうか、つまり入木による改刻や版木削除（不自然な空白）がないかどうか、それから早印か後印か（刷りの良し悪し）を判断することが望ましい。結局、やはり記述的な書誌データベースが理想的ということになる。

近世文学研究の妙味は、伝記研究がとりわけ有効である点にある。この方面については、国書人名辞典が研究基盤を提供してくれており、中でも別称・別号を網羅した索引は至便である。これに加えて、記述的書誌データベースが備わるならば、書物の序跋や奥書・識語・旧蔵印などを詳細に検索することによって、文人たちの未知の文業や人間関係について、大きな知見をもたらしてくれることは言うまでもない。ある文人が、思いもかけない分野の書物に序や跋を寄せていたというようなことがわかるわけである。

学生時代、東京大学附属図書館書庫内にある森鷗外自筆の覚書類をいくつも見たことがある。それらには近世期の叢伝書類に収められる人名や詩文集の詞書に見える人名が、罫線紙に次々と書き付けてあった。なるほど、伝記研究はこんな風に進めるのかと思った。そのような人名データが、個人の覚書を越えて大規模に集められても、思わぬ面白い結実を生むはずである。たとえば、西鶴同時代の啓蒙的著述家、山雲子（坂内直頼）の伝記は従来不明であったが、たまたま岩瀬文庫所蔵の『魯山和尚遺稿』という禅僧の詩文集写本の中に墓誌銘が入っているのが見つかり、一挙に判明したことがある。このような偶然の

機会をぎゅっと濃縮して、必然にまで高め得るならば、伝記研究にまったく新たな展開が生まれるに違いない。

二 語彙・用例

近世前期小説の研究において、大きな難関となつて立ちはだかるのが、語彙、特に近世語の世界である。また、記述のニュアンスや出典を知るためには、語句の用例を搜索する必要があるが、これまた難しい。前に触れた日本国語大辞典や、近世語に特に手厚い岩波古語辞典の存在はもとより大きい。しかし、当たり前の話ながら、いまだ万能というには程遠い。個々の研究者が、読書中に見つけた新たな用例を、カードないし手許の日本国語大辞典にこつこつ書き入れてゆくというような蓄積を重ねなければならないのだろう。が、それでは学問の進歩はいったどこにあるのだろうか。

近世前期文学が生んだ日本文化史上の至宝に古俳諧がある。近世初頭に本格化した俳諧精神は、それまで久しく文字の上にくい取られなかった、夥しい分量の事物や習俗や言葉に、初めて永遠の命を与えた。さらに有り難いことに、蕉風以前の古俳諧は、語の連想を重んじた付合文芸であるために、語句と語句との連想関係のネットワークを知る手がかりも膨大に残された。ところが、そのような貴重な財産でさえ我々は十分には活用出来ていない。いまだ「古俳諧全集」すら持たない。西鶴をはじめとする前期小説を深く理解するためには、少なくとも古俳諧の用例という手助けがなければ難しいと思われるが、その点では五十年前とさほど状況は変化していない。古俳諧はわずかな一例であるに過ぎない。

それでは我々は何をすべきなのだろうか。また卑近な体験から語りたい。岩瀬文庫所蔵『樵漁餘適』は寛保元年序跋刊、撰津池田に隠棲した漢詩人田中桐江（富春叟）の詩文集である。同書には対馬藩の漢学者、雨森芳洲が跋文を寄せており、文末には「対馬州文学原任用人芳洲雨森東（七十四歳）書／（刻印「樂此不為疲」「伯陽」「雨森東印」）とあった（自筆の模刻）。この芳洲所用印のうち「樂此不為疲」は珍しい。出典を知りたくなる。そこで台湾の古典検索サイト「寒泉」を見ると、ただちにこれが『後漢書』卷一下・光武帝紀に在ることを知る。すなわち、終日仕事に励んで休むことを知らない光武帝に、皇太子が少しは休息するように諫めたことに対する帝の返事が「我自樂此、不為疲也（我自らこれを楽しめり、疲れとなさざるなり）」なのであった。きっと芳洲にも、息子や門人が同じことを諫めたに違いないのであって、老いてますます盛んな芳洲の意気軒昂な姿が、出典の判明によってくつきりと浮かび上がるわけである。

日本の古典で同じようなことを調べようとしても、ことは簡単ではない。これほど簡便な古典検索サイトは存在しないからだ（台湾・中国には外にもまだまだある）。もちろん、粘着語で、語尾が活用し、表記もまちまちであるという日本語の特性が、コンピュータとの相性をひどく悪くしているという事情にも大きな原因がある。その外に日本の書物文化の性格も悪条件として作用している。

まず、前述した「文書的資料」の多さが、事態を難しくしている。岩瀬文庫で見た写本『地方要集録』は、近世中期の幕臣で御勘定所吟味役を務めた地方巧者、辻六郎左衛門（鶴翁・守参）が著した地方関係業務に関する慣例の覚書である。悉皆調査でもしない限り、まず繙くことがなかったにちがいない書物である。目を通して見ると、書中に森と林との区別についての記述があった。「森と言ふは、寺社等の境内等に木を植ゑ立て置き、茂り

て材木薪にも伐り取らず立て置き候を言ふ。林と言ふは、何方にても山川原か原等に木を植ゑ立て置き候て、材木薪にも伐り候木立茂りたるを林と言ふ也」とある。なんと明解な説明ではないか。ちなみに、日本国語大辞典(第二版)を見ると、森は「①神社などのある神域で、神霊の寄りつく樹木が高く群がり立った所。②樹木が多くこんもりと茂った所」、また林は「樹木の群がり生えている所」とある。『地方要集録』の説明がもつと広い時代にわたって一般化出来る説明なのかどうかについては、さらに用例の調査を要する。しかしながら、江戸時代中期、幕府の地方関係の役人の間で、このような認識があったことは意味の重い事実ではなからうか。

何が言いたいのかというと、思いもかけない書物、あるいは深い眠りにについている書物の中に、重要な用例が隠れている可能性である。つまり、何かについて調べようとして、見当を付けた書物に当たるといふ一般的な方法には、どうしても限界がある。しかし、このような雑多な資料の多さは、個人的に調査を進めようとする者の意気を阻喪することだらう。

さらに、日本の古典テキストが一般に定本を持たないことも悪条件の一つである。決定版を作ろうという強大な政治権力が現れなかったこと、版本が一般化するまでの写本文化が長かったためにテキストの多様性に対して寛容であったこと、がその原因だらう。したがって、一つの古典について何種類ものテキストを用意しなければならない。

以上述べ来たつたように、漢字文化圏と比べて、二重三重の手かせ足かせを余儀なくされているのが、日本の書物をめぐる状況である。その結果、せつかく古人が厩大に残してくれた書物という文化遺産も、ただそこにあるというだけで、我々は十分に活用することが出来ないでいる。この悲惨ともいふべき窮状は、研究者のみならず、世の多くの人々が、きちんと認識しておくべき事柄であらう。そして、このことが、長い目で見て日本の文化力、そして国力に悪影響を及ぼすことを恐れる。過去を重んじない(あるいは重んじようにも重んじ得ない)国に、明るい未来などないからである。

そこで前段で述べた記述的書誌データベースに続いて、もう一つの提案である。

ここに大きな壺をこしらえる。その中に、日本の古典籍にかかわるあらゆる研究者が、手許で持えたテキストデータを流し込んでゆく。古典籍を翻刻刊行する場合にも、データを提供していただく。そして、誰もがいつでもこの壺にストローをさしこんで、用例という美酒を享受することが出来るのである。これを「文壺(ふつぼ)」と名付けておこう。

もとより簡単な事業ではない。しかし、もしも文壺が制度化し、数十年をかけて順調に育ったならば、我々の生きたあかしを未来の研究者に確実に贈ることが出来る。これが学問の進歩ではないだらうか。

小稿に記した二提案に対して、そんな事業は怠惰な研究者を増やすだけだ、という批判がある。たしかに書誌なり語彙なりを博搜する過程で、研究能力は成長する。無駄足に終わる努力も決して無駄ではない。しかしながら、国書総目録や、古くは国歌大観にも同様の批判はあり得たはずであろう。従来型の研究を縮小再生産し続けたのでは、気づいたら国語国文学の学科や学会がこの世から消滅していたということになりかねない。

そうではなく、国語国文学の世界が資料や語彙を搜索するという労苦から解放されて、さてどのような新たな仕事が出現するのかが見てみたい。わくわくするような古典の新た

な解釈が続出するのではないか。国語国文学研究の新たな地平がそこから広がることだろう。『国語と国文学』の千号を祝しつつ、来る千号の続刊を心より祈念する。

——しおむら・こう 名古屋大学教授——